

柳田国男と民俗学：現代への思想（特集 高校の教科書に出てくる 日本仏教と日本の思想）

著者	笹原 亮二
雑誌名	大法輪
巻	77
号	9
ページ	117-117
発行年	2010-09-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/4914

柳田国男やなぎだくに おと

民俗学みんぞくがく

◆官僚、文学者、農政学者の民俗学

柳田国男は、明治八（一八七五）年、兵庫県福崎町に生まれた。その後、茨城県利根町に転居した。東京帝大政治学科から農商務省入省、法制局参事官、貴族院書記官長を歴任した。官界を離れた大正十（一九二〇）年朝日新聞社客員となり、翌年国際連盟委任統治委員としてジュネーブに赴いた。大正十二年に帰国、自宅に民俗学研究所を開設し、民俗学の研究を進めた。学生時代には新体詩人として活躍し、官僚時代は大衆で農政学を講義する研究者でもあった。

◆郷土研究としての民俗学

戦前柳田は、自らの学問を「郷土研究」と称していた。郷土研究とは「平民の過去を知ること」である。「我々平民から言へば自らを知ること」で、「人に教へられたり書物に述べてあつたりすること」を「自分の力を以て確かめてみる」、つまり、自らの歴史を自ら明らかにする社会運動としての歴史の研究が柳田の郷土研究、即ち民俗学であった。そこで、柳田が注目したのが口頭伝承や慣習であった。「郷土人の個々の小さき挙動表現、内部感覚の中にも、必ず歴史の痕跡あとざき、つまり某々郷土の住民の末なるが故に、残つてゐる何等なんらかの生活の特徴がある」ので、それを史料とすれば、誰もが自ら歴史を考へることが可能となるとした（柳田『郷土生活の研究法』）。

◆学問救世と分権的な歴史

柳田が民俗学を提唱したのは、「学問救世」という考えからであった。人々が直面する現在の問題は、多くの場合、原因は過去に存在する。従つて、解決には「過去の知識を必要」（柳田『郷土生活の研究法』）となり、歴史の研究が不可欠となる。その場合、必要となるのは、国全体の歴史よりも、自らが暮らす地域の歴史となる。この点も、歴史を「各自の郷土に於て、もしくは郷土人の意識感覚を透して、新たに学び識らう」（柳田『国史と民俗学』）、つまり、人々が、自らの生活感覚に基づき主体的に歴史を考へるといふ、地方分権的な歴史の発想である。こうした柳田の視角は、現地の視点と歴史的な解きほぐしが指摘される昨今の沖縄の基地問題を見ても、未だ有効性を失っていない。（笹原）